

フリガナ		所属	大学院人間文化創成科学研究科 博士前期課程 理学専攻
氏名	MK		数学 コース 1 年
派遣先名 (国名)	バーギシェ・ブッパタール大学 (ドイツ)		
派遣期間	(日本出発日)	(日本到着日)	
	2025 年 9 月 25 日	～	2026 年 2 月 6 日
指導教員 氏名	久保 隆徹		

## 1. 留学前、留学後で変化したこと

留学前、本プログラムに参加する目的として、①英語による専門知識の習得、②国際コミュニケーション力の向上の 2 点を掲げていた。

### (1) 英語による専門知識の習得について

私は、感染症の数理モデルの研究を進める中で、解析に必要な数値解析の知識が不足していることを課題として認識していた。そのため、留学中は数値解析に関する 2 科目を履修し、理論とシミュレーションの両面から理解を深めた。演習では英語によるプレゼンテーションの機会があり、板書と口頭説明の使い分けについて指導を受けながら改善を重ねた。最終的な口述試験のプレゼンテーションでは評価をいただくことができ、自身の成長を実感した。一方で、質疑応答では、即座に数学的な説明を組み立てる難しさも痛感し、今後の課題が明確になった。特に大きな変化は、困難に直面した際の姿勢である。これまでの私は、理解が不十分なまま一人で抱え込みがちであったが、今回は事前に教員に相談し、友人に発表練習を依頼するなど、自ら周囲に働きかけることができた。主体的に学習環境を構築する姿勢を身につけられたことは、専門知識の習得以上に重要な成果であったと感じている。今後は、留学で学んだ数値解析の手法を修士研究に具体的に反映させ、より実証的なモデル構築へと発展させていきたい。

### (2) 国際コミュニケーション力の向上について

留学先には想像以上に多様な国籍の学生が集まっており、それぞれが明確な目的意識を持って学んでいた。その姿勢に大きな刺激を受けた。日常的な会話の多くは、英語を母語としない者同士によるものであった。そのため、相手に配慮しながら言い換えや確認を重ねて意思疎通を図る経験を数多く積むことができた。日本では、うまく伝わらないときに会話を諦めてしまうこともあったが、留学中は「理解し合おうとする姿勢」そのものがコミュニケーションの本質であることを実感した。また、文化や習慣の違いに戸惑う場面もあったが、自身の価値観を絶対視するのではなく、相手の背景を理解しようとする姿勢の重要性を学んだ。自分の常識を押し付けるのではなく、互いに歩み寄れる地点を探ることが、協働の基盤になることを体感した。さらに、言語面で困難を感じる場面でも、周囲の人々が温かく支えてくれた経験は、異文化環境で生きる上での大きな安心感となった。この経験を通じて、マイノリティの立場で生活することの意味と、その中で発揮される柔軟性や適応力の重要性を実感した。

## 2. 将来のビジョン

今後は、留学先で修得した数値解析の知見を活かし、修士研究をより実証的かつ発展的な内容へと深めていく。また、専修免許状（数学）の取得に向けて引き続き関連科目を履修し、専門性の幅を広げていきたい。将来的には、コンサルタントとして多様な顧客の課題解決に伴走できる人材になることを目標としている。課題の本質を見極め、手段ありきではなく、現場の声に真摯に耳を傾けた提案を行える存在を目指したい。そのためには、自分とは異なる価値観や立場を尊重し、建設的な議論を重ねる姿勢が不可欠である。本留学で培った対話力と柔軟性を基盤として、国内外を問わず多様なプロジェクトに積極的に挑戦していきたい。留学中、多くの人に支えられた経験を忘れず、今後は自らが他者を支え、必要とされる存在へと成長していきたい。